

令和4年度病害虫発生予察情報 発生予報第3号

令和4年6月30日
発表：福島県病害虫防除所

1 普通作物

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	やや少ない	天候予報（仙台管区気象台6月23日発表）によると、向こう1か月の気温はかなり高く、降水量はやや少ないと予想されている（－）。	発生の早期発見、早期防除に努める。特に多肥田では発生しやすいので、注意する。 長雨のため防除適期を失すおそれのある場合は、雨間散布を行う。
	紋枯病	全 域	平年並	やや少ない	前年の発生ほ場割合は平年より低かった（－）。 天候予報によると、向こう1か月の気温はかなり高く、降水量はやや少ないと予想されている（±）。	窒素肥料の多用を避ける 薬剤散布を行う場合は、穂ばらみ期に実施する。 気温が高いと上位葉鞘への伸展が早いため、注意する。
	斑点米カメムシ類	全 域	－	平年並	6月下旬の水田畦畔すくい取りでの発生地点割合は平年よりやや低かった（－）。 天候予報によると、向こう1か月の気温はかなり高いと予想されている（＋）。	畦畔や水田周辺のイネ科雑草の穂は斑点米カメムシ類の増殖源になるため、草刈りを励行し、出穂10日前頃までに終了させる。

注) 予報の根拠の中で（＋）は多発要因、（－）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

水 稲	<p>■イネツトムシ（イチモンジセセリ）</p> <p>本虫は、直播栽培や葉色の濃いほ場では被害が大きくなりやすくなります。</p> <p>本年は、6月上旬の低温の影響で生育に遅れが出ているほ場が散見されており、そういったほ場では今後の高温で葉色が濃くなり、被害が大きくなる懸念があるため、特に注意してください。</p> <p>なお、2～3枚の葉をつづり合わせた「ツト」を作る中齢以降の幼虫の防除は効果が劣るため、発生が目立つ場合は早期防除を心がけてください。</p>
-----	--

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年より高かったが、発生程度は低かった(±)。	薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	褐斑病	全域	—	やや多い	新梢葉及び果そう葉での発生は確認されず、発生ほ場割合は平年並であった(±)。 昨年秋季(令和3年10月)の新梢葉での発生ほ場割合は平年より高く、発生程度の高い園地も見られ、本病の越冬量は多かったと推察される(+)。	薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。 7月以降は二次感染期となるので、本病に有効な薬剤を使用して感染拡大を抑える。
	黒星病	中通り 会津	—	平年並 やや多い	新梢葉での発生ほ場割合は中通りでは平年並(±)、会津では平年よりやや高く、果実での発生も見られた(+)。	罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	新梢葉での被害発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	アブラムシ類	全域	—	平年並	新梢寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
	モモ	灰星病	中通り	—	平年並	果実での発生は平年同様に確認されなかった(±)。
せん孔細菌病		中通り	—	平年並	新梢葉、果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。また、混植園では使用時期(収穫前日数)に十分注意する。
モモハモグリガ		中通り	—	平年並	新梢葉被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
アブラムシ類		中通り	—	平年並	新梢寄生は確認されず、発生ほ場割合は平年並であった(±)。	

モ	モ	ハダニ類	中通り	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
ナ	シ	黒星病	中通り 浜通り	—	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)が、 果実での発生ほ場割合は中通りでは平年よりやや高く(+) 、浜通りでは平年並であった(±)。	罹病部位は見つけしだい除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
		アブラムシ類	全域	—	平年並	新梢寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
		ハダニ類	全域	—	平年並	新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、薬剤散布を実施する。
果樹共通		カメムシ類	全域	—	平年並	ナシでの果実被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	園地への飛来を確認したら薬剤散布を実施する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(-)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト(被覆栽培)	灰色かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	葉かび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	多湿条件で発生が多くなるので、換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。 ほ場の開口部をネット被覆するように努める。
	コナジラミ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった(±)。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった(-)。	ほ場への侵入を防ぐため開口部を防虫ネットで被覆する。 ほ場をよく観察し、発生初期から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった(-)。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。

夏秋キュウリ（露地栽培）	べと病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）が、天候予報（仙台管区気象台6月23日発表）によると、向こう1か月は気温がかなり高く、降水量はやや少ないと予想されている（－）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、発生初期から防除を実施する。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
	炭疽病	全 域	—	やや多い	発生ほ場割合は平年より高かった（＋）。 天候予報によると、向こう1か月は気温がかなり高く、降水量はやや少ないと予想されている（－）。	発病葉は摘除し、発生初期から防除を実施する。 排水対策の徹底、過湿防止、資材の消毒に努める。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	低密度時から防除を徹底する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。 品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった（－）。	低密度時から防除を実施する。 薬剤抵抗性の発達が懸念されるため、薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった（－）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は平年より低かった（－）。	中位葉以上での発生に注意し、低密度時から防除を徹底する。
リンドウ ※過去7年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	—	例年並	発生ほ場割合は例年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合は例年より少なかった（－）。	ほ場をよく観察し、防除を徹底する。

野菜・花 き共通	タバコガ類	全 域	—	平年並	発生ほ場割合は平年並であった (±)。	生長点付近をよく観察し、寄生 や被害が見られた場合は、速やか に防除を行う。
-------------	-------	-----	---	-----	------------------------	--

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマ ト(被覆栽 培)	<p>■トマトかいよう病</p> <p>本病は種子や土壌中の残渣に生存している病原細菌が第一次伝染源となり、その後、芽かきや収穫、誘引などの管理作業による二次伝染により被害拡大します。発病が疑われる株は管理作業を後回しにし、作業手袋やハサミ等をこまめに消毒し、被害拡大を防ぐようにしてください。万が一、ほ場で発生した場合は、発病株を速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分してください。昨年発生しているほ場では注意してください。</p> <p>■タバココナジラミと黄化葉巻病</p> <p>2006年にタバココナジラミ・バイオタイプQの発生が本県のトマトで確認されています。現在までに、中通り、会津南部、浜通りで本種の発生が確認され、また、本種が媒介するトマト黄化葉巻病ウイルス(TYLCV)も中通り北部、会津南部、浜通り南部で確認されています。</p> <p>昨年も黄化葉巻病の発生が確認されています。本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染はしません。また、タバココナジラミ以外のオンシツコナジラミ等による虫媒伝染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くなるように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所HPに掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病(TYLCV)のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf</p>
野菜・花き 共通	<p>■ウイルス病(アブラムシ類、アザミウマ類媒介による)</p> <p>アザミウマ類が媒介するトマト黄化えそウイルス(TSWV)、アブラムシ類が媒介するキュウリモザイクウイルス(CMV)の発生を防止するため、防虫ネットや光反射資材の設置等による飛来防止対策と発生初期からの防除を徹底してください。また、ウイルスの感染株を治療することはできないので、モザイク症状等の病徴が見られる株は、可能な限り抜き取って適切に処分してください。</p> <p>キュウリでは、CMV、WMV及びZYMV等のウイルスの感染により急性萎凋症が発生する場合がありますので注意してください。</p>

詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。